大東中学校　校長通信 40

## 生かされてご恩として生かして生きる

先日、毎月購読している雑誌「致知」の新春特別講演会が東京であり、勉強に行ってきました。以前、この講演会で茶道裏千家前家元の千玄室さんの話に感動し、お茶を始めました。また、アーティスティックスイミング元日本代表監督の井村雅代さんや世界的デザイナーのコシノジュンコさんのお話からも刺激を受けました。

今回は青山俊董さん（愛知専門尼僧堂堂頭）と五木寛之さん（作家）の講演でした。お二人とも 91 歳という年齢を感じさせない溌剌とした話し方、たたずまい、また迫力でした。五木寛之さんは、『大河の一滴』や『親鸞』など多くのベストセラーを生み出し、多くの文学賞も受賞し、今もなお現役の作家として活躍中なので、知っておられる方も多いと思います。一方、青山俊董さんは尼さんです。私が知ったのは、10 年前ぐらいですが、数えの５歳の時に仏門に入り、それ以後 80 年以上にわたり曹洞宗の道を歩いてこられました。昔でいう「不良少年」や犯罪少年の更生にも人肌脱がれていたので、その取組を本で読んだのが最初でした。

青山さんは 85 歳ぐらいまではお元気で相当無理もされていたそうです。それがこの５年間で脳梗塞、心筋梗塞、大腸がんになられました。大腸がんで入院し、あと退院まで５日というところで心臓発作が起きました。その際の心臓マッサージで肋骨１本が折れ、２本にひびが入る。さらには、がんが肝臓にも転移する、といった人生を送っておられます。そのことを知っていたので、どんな老人が出てこられるのかと複雑な気持ちで講演会に行きましたが 91 歳には見えないし、病気と格闘中とも感じませんでした。本人は笑顔で「病気のおかげでどうにか一人前になれました」と話を始められました。「生かされてご恩として生かして生きる」というテーマの中、「何を幸せにするか、選ぶ目の高さ、深さが人生を変える」という冒頭の言葉がまず印象に残りました。次に、「人間は裸で生まれて裸で死んでいく。その中間に様々な着物を着る。女王のような華やかな着物、乞食、僧服、社長、主義、うぬぼれ、劣等感・・・。すべて衣装。ほとんどの人がこの衣装とか持ち物に眼を奪われ、裸の自分自身をどうするかを忘れている」と。「衣装の着手の私、持ち主の私自身の今日只今をどう生きるかを問うことを忘れている」ともおっしゃり、「そのことに気づかずに、ああしたい、こうしたいと『たい、たい、たい』と自分の欲望のまま突き進む」、「欲イコール悪でなく、それが向上心や世の中のためという利他行へ向かわなければいけない。天地総力挙げての働きによっていただいた命だから、ご恩として天地いっぱいにお返しすることが必要」と。さらには、「受け皿が小さければ尊い話も受け止められない」、「大事な話は耳鳴りがするくらい聞け、そして初めて聞くつもりで聞け」と、そんなところが印象に残りました。私は「足るを知る」という言葉を思い出し、感謝を忘れず恩返しができるようもっと学ぼうと思いました。今年も読書、講演会、芸術・音楽、趣味の時間を作りたいものです。(2024.2.5)